

学習はキッド ウォッチングから 始まる

キッドウォッチング

カリキュラムが

たてられて（指導

目標と指導内容が

決まって、そこに

教科書（教材・学習

材）があれば、授業は

始められます。けれども

それは本物の国語教室ではあり

ません。主体である子どもたちの声が聞こえないからです。子どもは生きています。動いています。考えています。言葉を発します。言葉を核に学びが営まれ継続しているとき、国語教室は生きています。そのためには子ども一人一人がとらえられていなければなりません。キッドウォッチングです。→ingですから、計画の段階から学習中、学習後、常に一人一人がとらえられているということなのです。これは、評価でもあります。

学習者をとらえる機会と視点

子どもをとらえる機会はいくらでもあります。授業に即して言えば、学習前、学習中、学習後です。発した言葉、書きとめたもの、取った言語行動の中にそれはあります。国語力（知識・技能）、語彙力（質と量）、言葉への関心、情報操作力、学習スタイル、読書生活、読書傾向、言葉や事柄や人間へのかかわり方・考え方の個性、表現・発信のスタイルの個性などがそれぞれでしょう。

あたりまえのことですが、子どもは一人一人違います。同じ文章を読んでも、同じ場所でも同じ話を聞いても、感じ方や受けとめ方は人それぞれです。違うからこそコミュニケーションを交わす必要を生じます。コミュニケーションを交わすことで人は他者の考えを知り、自己を豊かにしていきます。学習としてのコミュニケーションは、一人一人の子どもをとらえることから始まります。

例えば、文章や作品を読んで感想を書くとしても、第一次の感想はメモ程度の行為ですが、それでも文章に対する一人一人の読みに対する姿勢や傾向は知ることができます。文章の部分に反応し

ている姿、主題まで考えようとする構え、美しい

言葉や人の行為に感動する心などさまざまです。一

人一人の子どもの姿を予測して授業構想に結び付

けられれば、教師としての力はかなりあるといっ

てよいでしょう。あの子どもがこう考えるだろうこ

の子ならこんな書きだして文章を書くだろうとい

う類です。そのために子どもをとらえる視点は

押さえておきましょう。

文章の読みでも視点は次のように整理します。

(1) 関心はどこによせられているか

・文章の内容―事柄や人間に関して

・書き手の考えや主張に対して

・文章の中の言葉や表現に対して

(2) どんな思考の展開を見せているか

・受容か、発見か、驚きか

・共感か、同調か、納得か

・疑問か、反発か、批判か、意見か

・拒否か、無視か

(3) 認識・思考の方向性

・対目的か

・対他的（書き手、読み手、社会一般）か

・対事的（対目的でも対他的でもない）か

実際に表れたものは、これらの総合で、中には教師や学友を意識したり、自己表現にかかわるさまざまな意識が見え隠れしたりして一様ではありません。これらは教師との人間関係でとらえていきます。

指導者も他者の一人である

このようにさまざまな姿を見せる子どもたちですが、一次感想を皆で読み合つと、他者の考えを知り、付け加えたり、新たな考えを産み出したりして、子どもは変容し、成長します。一次感想に重ねて二次感想、三次感想を重ねていく学習にだけでも効果があります。他者の考えを知ることによって自己を豊かにする、これは大人の学習のスタイルです。大人の学習スタイルを身につけさせるために指導者は教室では他者の一人になり考えを述べる、そのほかにもモデルになったり支援したりして教室を盛り上げます。子どもはそういう先生を求めますし、教師もその中で成長していくようです。

（大正大学教授）